



TITLE:

中央教育科学研究所との学術交流: 日中合同会議 2010年度

AUTHOR(S):

大下, 卓司

CITATION:

大下, 卓司. 中央教育科学研究所との学術交流: 日中合同会議 2010年度.
子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書(2007-2011年度): 117-118

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179691>

RIGHT:

日中合同会議 2010年度

1. 研究の概要

2006年10月27日、京都大学大学院教育学研究科と中国中央教育科学研究所との間に学術交流の協定が成立した。2007年1月28日には、日中教育共同研究センター設立の協定が締結された。本センターではこれまで、日中両国の間で問題を共有し、限定的かつ具体的な研究課題に取り組んできた。両国の教育研究・実践の進展に寄与する成果を着実に蓄積しつつ、息の長い学術交流を実現できると考えている。

具体的には、第一に、日中の小学生を対象とする学力比較調査の実施、及び結果の分析を計画している。その際、両国の理論的・実践的問題を踏まえ、内容を絞って共通調査を実施する。これにより、両国の学力形成上の課題や実践改善の指針を具体的に示すことができよう。第二に、授業実践にまで踏み込み、日中間で授業研究を行う。これまで、一部の都市に留まるものの中国において国内学力調査、及びIEAやOECDによる調査をはじめとする国際学力調査が実施されてきた。しかしながら、これらの研究において平素の授業実践と子どもの学力との関係は十分に明らかにされてこなかった。そこで、本研究では、学力調査と授業研究を行うことで、中国における平素の授業と学力形成の関係を明らかにする。これにより、学術的な成果のみならず、現場に直接フィードバックすることが可能となろう。また、昨今、目覚ましい発展を遂げ、国際的な最新の教育動向を積極的に取り入れている中国の学校教育を検討することは、日本の学校教育現場に対しても豊かな示唆を与えることを可能とするだろう。

そこで、2007年3月には、京都大学の研究チームにおいて定例研究会を立ち上げた。研究会の成果を踏まえ、2007年度は、6月（於中国・中央教育科学研究所）と12月（京都大学）に日中合同会議を開催した。6月の会議では日本の授業研究や学力調査の動向、減法や除法の単元の教科書や授業の日中比較について交流した。12月の会議では、分数の単元について日中双方から報告がなされ、いずれも活発な議論が交わされた。

2008年度は、11月（於中国中央教育科学研究所）に日中合同会議を開いた。北京市の小学校において授業観察を行った後、会議では学力調査に関する報告、及び除法の単元の日中比較が行われた。実践と理論の両面から教育の実態に迫った年度であった。

2009年度は、各国の学力調査の動向を検討し、調査に関する基礎研究を行った。全米学力調査や英国のナショナル・テストといった学力調査を検討し、各国の調査の特質を明らかにしつつ、学力比較研究のための知見を得た。これらの研究の成果を6月（於京都大学）と11月（於中国・中央教育科学研究所）に日中合同会議にて共有した。

本年度は、同研究所との5年間にわたる学術交流協定が区切りを迎える年度となった。そのため、9月に

は協定の更新に向けた同研究所との予備折衝及び、四川省成都市にて小学校の授業観察を行った。加えて、10月には同研究所から袁振国所長を招き、学術交流協定の再締結のための調印式、及び公開シンポジウムを開催した。

2. 日中合同会議（9月）

2010年9月17日から21日にかけて、日中合同研究会（17日）、小学校訪問（20日）を目的として訪中した。17日の日中合同研究会では、10月に控えた学術交流協定の調印式にて使用する調印文書の最終確認が行われた。

20日には、四川省成都市のパイロットスクール成都市東城根街小学校を訪問し、授業観察をおこなった。ここでは、理科・英語・芸術の授業を観察した。

理科においては、2008年の四川大地震をきっかけに、地域カリキュラムとして導入された防災学習の授業を観察した。理科の教師が視聴覚教材を用いて、落雷の危険性に関して、全体で共有したのち、児童は室内外で雷から身を守る方法をグループにて話し合った。その後、グループ対抗でクイズを用いた学習内容の定着が図られた。



▶理科の授業の様子

英語の授業では、9月の授業ということで中秋節とハロウィーンを題材とした授業が行われた。授業はすべて英語でなされ、ハロウィーンを場面とした視聴覚教材を利用しながら、“Who are you?”、“Trick or treat!”などのキーセンテンス・キーワードが学習された。その後、学習したフレーズを使って、児童は互いに家を訪ねてお菓子をもらうロールプレイを行い、学



▶英語の授業の様子

習内容の定着が行われた。

芸術では、水墨画（青花山水）の授業を観察した。ここでも、視聴覚教材を通じて、はじめに中国の第一級の芸術品においても水墨画の基礎的な技法、例えば5段階の濃淡や遠景・中景・近景などの描き方、が利用されていることが示され、今日の授業の学習内容が確認された。その後、基礎的な技法を習得すべく、様々な用途に応じた線の描き方が学習された。この基礎的な技法を土台に、半紙とうちわに代表的な山水である山や海に加え、子どもが家や船などを自由に書き添えていた。



▶ 芸術の授業の様子

以上の授業を観察したのち、検討会が設けられた。検討会では、双方が挨拶を行った後、理科・英語・芸術の授業それぞれについて意見が交わされた。理科に関しては、教師が子どものつまづきを否定せずに、授業に生かしていた点、特に視聴覚教材にみられた教材づくりにおける教師の工夫、本授業のカリキュラムの位置などについて京都大学の側から意見が出された。これに対して授業者の教師は、この授業が、総合的な学習に相当する内容の一つであり、生命や自然と関連が深い点で理科の授業に位置づけられて教えられていることなどを応えていた。英語に関しては、活動に傾倒するのも、文法のドリル式の学習に陥るのでもなく、活動と文法事項の学習がバランスよく取り入れられていた点などが指摘された。日本では小学校において英語が必修の教科となっている。今回観察した中国の授業も、こうした点から非常にタイムリーなものとなった。最後に、芸術に関しては、カリキュラムにおける水墨画の位置づけや学習形態、中国の第一級の芸術作品と関連付けながら授業が行われていた点に関して京都大学の側から質問があった。これに対し、授業者は水墨画の授業自体は少ないものの、3分の1程度の児童は有名な画家の下でこれを勉強していることなどを応えた。

また、中国の側からは日本の教育課程の改革動向などについて質問がなされた。これに対しては、今年度改訂され、来年度から使用される日本の検定教科書にその特徴が具体的かつ鮮明にあらわれることが予想されると応え、教科書のやり取りなどを通じて今後につなげていく考えが示された。

今回の授業観察においてもその一端が垣間見える通り、中国の小学校においては教科担任制が採られ、各教科で専門性の高い授業実践が行われている。このことは、授業のすべてを英語で行われていた英語の授業でも色濃く表れていた。他方で、日本では学級担任制の下で初等教育が行われ、子どもに対する深い理解を可能にしている。このことは、日本のこれまでの数多くの優れた授業実践にもあらわれている。こうした両国の教育制度上の違いを踏まえつつ、個別具体的な授業の観察や、学力比較調査を行うことで、高い学力を育む授業実践の特質に迫ることができよう。



▶ 授業検討会の様子



3. 今後の日中合同会議

本年度10月、中央教育科学研究所から袁振国所長をお招きし、学術交流協定の再締結のための調印式、及び公開シンポジウムを開催した。これにより、本年度より5年間にわたり、本学教育学研究科と同研究所との日中合同会議が継続されることになった。これまで、同会議において、日中の教科書比較研究、授業の比較研究が継続的に取り組まれてきた。これに加えて、昨年度には日中共同著作として『21世紀的日本教育改革——中日学者的視点』が中国において出版された。同書では、日本における昨今の教育改革を日本の研究者がいかに評価・総括し、どのような展望を持っているのが示された。これを中国の研究者が解説を交えながら中国に紹介する構成となっている。出版を記念して、2010年3月17日に中国中央教育科学研究所において出版記念シンポジウムが開催された。これに出席すべく昨年度3月、同研究所を訪れた。同日には京都大学の側からも、記念講演「教育財源調達の政治経済学」（教授・高見茂）が行われるなど緊密な国際学術交流となった。

学術交流協定の更新を迎え、これまでの成果を継承しつつ、今後より発展的な学術交流を行うことが求められる。以上が2010年度の日中合同会議の報告である。

（文責：大下 卓司）